

助成年度：平成 10 年度

[所属] 北海道大学大学院 地球環境科学研究科

[役職] 助教授

[氏名] 渡邊 悌二 (他計 4 名)

[課題]

大雪山国立公園における自然環境への人為的インパクトの評価と 環境保全をめざした新たな公園利用方策の提言

[内容]

この研究の目的は、1) 登山道・野営指定地を中心に、自然環境への人為的インパクトの分布を明らかにし、インパクトの量的な評価をすること、2) 国立公園の利用・管理にたいして利用者がどのような問題点を認識しているかを明らかにすること、および 3) 管理上の問題点を整理したうえで、これらの解決のための方策を模索することである。

大雪山国立公園には、たくさんの登山道や野営指定地がある。これらの多くは自然発生的に発達してきたと考えられ、国立公園の管理計画のなかに位置づけられてその設置場所が決められたわけではない。そこでこの研究では、現地調査ならびに航空機からの写真撮影によって、自然環境への人為的インパクト（土壌侵食・植生破壊）を明らかにし、自然発生的に発達してきた現在の登山道・野営指定地の設置場所の妥当性について考えた。その結果、1) 現在の登山道の設置場所のなかには、土壌侵食が発生しやすい場所があり、そうした場所に多大の資金を投じて管理を行おうとしても大きな成果は期待できないこと、2) 植生の多様性や組成変化に影響を及ぼす要因として、土砂の流入が重要であること、3) 現存植生の維持と破壊された植生回復のためには、植生と地形・土壌・積雪などの立地環境にあわせた早急な対応が必要であることが明らかにされた。

つぎに、利用者意識調査を行い、大雪山訪問の目的と利用・管理上の問題点を質問し、利用体験に基づくゾーニングの基礎的データを収集した。また、利用に伴うインパクトを軽減する対策としての「ローインパクト法」に対する質問をし、登山者の認識の現状を把握した。利用者の立場からは、登山道・野営指定地の土壌侵食・植生破壊だけではなく、トイレが大きな問題として認識された。トイレの設置場所は、登山道や野営指定地・避難小屋などの設置場所との関係において議論されるべきであり、自然環境へのインパクトを調査したうえで議論されるべきである。

このように、山岳国立公園全域の登山道・野営指定地の自然環境要因と人為的インパクトについての評価を行った結果、これらの付け替えや休止を含めた、長期的な利用・管理計画を模索する時期にきていることが明確になった。短期間の対策としては特に、どこをどのように管理して行けばいいのかといったプライオリティーづけが重要であろう。